

昭和五二年二月一日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社 発行人 滝野 忠

東京都渋谷区本町六丁目二八の二コトボ幡ヶ谷九〇四 電話(03)37714649 FAX(03)37714649
振替 東京0158431 労金 東京労金本店No50234

購読料 月額400円 6カ月前納制

〈もくじ〉

■巻頭言■

政治展望を切り開くために……………2

◇選挙闘争をたたかって◇

女性の本格的な政治参加の走りを実感(新潟)……………3

「連合」でなく社会党こそが逆転の原動力(岡山)……………5

行財政「改革」で矛盾が激化(長野)……………7

「ヤルしかない!」⑩「社会党の抵抗性」という「源泉」……………9

参院選から京都市長選へ……………10

党建協、第三回総会・記念講演会に参加しよう……………11

社会党の「基本政策」転換を許すな……………12

◇灰原茂雄氏と語る(二)◇……………15

「友情は人生の花である」をわがものに……………15

読者からのおたより……………14

号外「われら今、何をなすべきか―都議選、参院選総括」

九月六日発行、定価三百円 ご購入を!

旬刊 社会通信

NO. 414

一九八九年九月一日

一九八九年九月一日発行
(毎月一日・二日・二日三回発行)

■ 巻頭言 ■

政治展望を切り開くために

参院選の社会党の大勝は二つの可能性を生んでいる。一つは、消費税廃止をめざす闘いや、政治改革、総選挙の闘いにかんよつては、社会党は勤労国民の支持を固めて、腐りきった自民党の政治を早期に終わらせることができる可能性である。反自民の国民連合政府を勝ちとることよつて、独占資本による独占資本のための政治から、勤労国民による国民のための政治に転換することも射程距離にはいる（そのためには、現状の一三〇人程度の衆議院候補者では話にならず、四、五名区に複数候補の擁立が不可欠であるが）。もう一つは、あわてて与党になろうとするあまりに、基本政策や原則を棄ててしまひ、その結果自民党との闘いのほこ先も鈍つて、たちまち国民の信頼を失つてしまふ可能性である。独占資本は、来るべき総選挙で自民党が政権を失うことがないように全力をあげることはいうまでもないが、自民党が大敗する事態にも備えている。民社党や公明党を買収しようということだけではない。社会党をも牙のない無害な党にしようとしている。社会党に基本政策を放棄させようというのである。社会党がどんなに躍進しても独占資本にとつて安心な、保守二大政党体制を実現しようというのである。

総選挙の結果、国民連合政府ができたとしても、今日の条件でその政府が二年や四年のうちには安保や自衛隊や原発をなくすることができるとは我々も考えない。しかしそれらをなくするという目標のもとで、軍拡から軍縮へ、核持込み黙認から核持込み厳禁へ、米軍基地の拡充から縮小・三宅島計画などの中止へ、合同演習や共同作戦研究の中止へ、原発や核燃サイクル基地の建設中止・欠陥炉の休止へ、と方向転換できるかどうか最大の問題となる。もしそのとき社会党が、安保や自衛隊や原発をなくして非同盟・非武装中立、脱原発の日本を実現しようという目標を棄ててしまつていたら、この方向転換を勝ちとるエネルギーは生まれようがない。その目標に向けての第一歩を踏み出すことはできなくなる。自民党の政策を基本的に肯定し、継承していくしか道はなくなる。

我々は現憲法を守り非武装中立をめざして全面軍縮を実現しようとしているからこそ、消費税を廃止し、税制を民主的に改革して庶民の減税を実施し、なおかつ福祉の充実を推進することができる。軍拡を続けるのであればそれも不可能となる。

しかしこの基本政策を棄てさせようという誘導や攻撃はいよいよ強くなつてゐる。独占資本の諸団体からの要望がつきつけられている。公約違反の消費税やリクルート汚職などでは社会党に肩入れしてくれたかに見えたマスコミも、基本政策は放棄するよう積極的な誘導を開始している。社会主義を放棄することも勧めている。主流派が自民党との連合をめざしている民社党は、総選挙後を意識して首相指名選挙で土井と書かず白票を投じながら、社会党には基本政策の放棄を迫っている。野党再編をめざすという連合のもと、連合参議院もつくられた。総評は消えようとしている。

この重大なときに、党建協は結成二周年を迎え、九月一五、一六日には、別項のように全国交流集会と総会と記念講演会を開く。心ある黨員はここで十分な交流と論議を深め、社会党の眞の躍進のために全力をつくすことが期待される。

◆新潟からの報告◆ 女性の本格的な政治参加の走りを実感

連続した三つの選挙を闘って

社会党に親しみ

三か月におよぶ選挙が終わり、地域の顔馴染の女性たちと、久しぶりに会話して「オヤッ」と思う。まず、以前よりは、社会党に親しみを覚えてきているなと感ずる。さらに「台所のことを知らないものに、政治ができるはずがない」とか、「政治は生活に直結した身近かな問題」、あるいは、「男にばかり政治を任せていたのが悪かった」などという台詞が、こともなげに飛び出すのに驚かされる。四月末頃に比べたら、何という変容ぶりだろう。

「消費税は大嫌い。何とかならないの」「消費税の廃止なんて、本当にできるのかねえ」「自民党も嫌いだけど、社会党も頼りにならない」などと、腹立ち半分で口走っていたのが、ここへ来て調子が変わってしまった。「社会党にも、一度くらい政権を担当させたい」とか、「土井さんを首相にしてあげたい」と、トーンが積極的になったばかりか、せっかく、社会党が勝ったんだから、内部紛争を起こさないで欲しい」と、老婆心をのぞかせる女性もいる。

思うに、女性たちが、この間に受けた政治教育、学習効果というものは、大したものだったのだと言う他ない。

女性は「ルビコン」を渡った

消費税については、公約違反でもあったし、施行された直後から、巷に根強い不満と反発をひき起こした。大衆に増税を強いながら、サイン一つで、濡手に粟をつかむような、リクルート汚職。その上、嘘をつく政治体質の暴露。さらに、宇野首相の女性問題や、閣僚の女性蔑視発言が追い討ちをかけたのだから、「家計を預かる」主婦層が、自民党政治に憤激したのも当然だ。

女性たちは、怒り、あきれて同じ思いを抱いた広汎な大衆とともに、「ルビコン河」を渡ってしまった。マスコミは、この現象を「地殻変動」と呼んでいる。

背後に「時代の波」

知事選から参院補選へ、さらに参院通常選挙へと、回を重ねる度に、社会党の得票率は伸びた(志苦42・8%、大淵50・4%、稲村53・48%)。知事選での、自民党と県財界の「逆風」への応戦ぶりは凄じかった。大手土建企業は、「志苦が知事になると、県の仕事ももらえなくなる」と、危機意識をもって社員を集票に駆り立て、下請業者を締めつけた。ある主婦は、「毎晩、集票に疲れきって帰る夫をみると可哀相です。企業がつぶれては生活ができなくなりますし、今回は金子さんに投票せざるを得ません。でも私は消費税に反対ですし、心は社会党にあるので、とても複雑な気持ちです」と述べている。

日共系の長崎明氏は、元新潟大学学長としての人脈をもち、温厚な人柄がアピールして、善戦した。「見た目に感じがいい」という主婦はけっこう多かった。

知事選は、六二万票という、かつてない票を得ながら敗北した。敗因については、「革

新が分裂したから」と信じている人が多い。

これが参院補選になると、父親の弔合戦をした君候補に、約八万票の差をつけて、大淵候補が勝利する。これについて、「大淵さんは、女だから勝ったのではない。男が立候補していても同じ結果になったはず。志苦さんが僅少差で破れたことに、一番良く学んだのは有権者だった。知事選で長崎に流れた票が、今回は社会党にゆり戻したのだ」という分析があり、それは、票の動向を見る限り間違いいではない。企業の締めつけから解放された人々も、「インテリ好み」の主婦層も、こんどこそはと大淵さんに投票しただろう。ただ、それだけでは、一般的な票の分析はできても、女性たちの「内なる変化」を看過ごすことになりはしないだろうかと思うのだ。

「私の夫は自民党员なので、いつも選挙は夫の指図に従って来ましたが、今回は大淵さんに投票しました。私と同じ主婦なのに、大したものですよねえ」（五〇代）と、晴れやかな表情で話す女性。「今まで政治には無関心でしたが、今は何よりも政治の動きが面白いです」（五〇代）と語る女性。これは一体何なのか。もっとも、「自民党の政治を変える手つとり早い方法として、第二党に賭けてみた。社会党をそれほど好きな訳じゃありません」（三〇代）といったクールな意見もあることはある。「ここまで来たら冒險してみようと、自民党以外に投票する気で社会党へ。共産党は恐いですから」（三〇代）、「マスコミに煽られて社会党に投票した女性も多いんじゃないですか」（三〇代）、「地殻変動なんて大袈裟です。表層雪崩にすぎませんよ」（三〇代）と、シビアに女性の動向を分析してみせる三〇代の女性たちも、その多くが社会党に投票している。

マスコミの一部に「四・五十代のオバタリアンが、低レベルの政治感覚で、前後のみさかにもなく社会党に投票した」という主張が載った。大衆の感覚を馬鹿にしていると思う。これだけ腐敗した政治をつきつけられて、目の醒めない方がよほどどうかしているのだ。大淵さんの立候補を、農村の女性たちは感激して迎えた。「隣りの主婦」という感じの大淵さんを見る時、被選挙権は誰にでもあるのだということを感じ起こさせる。大淵さんの勝利に続く都議選での女性候補の大量当選は、「女が女を選ぶ」選挙に時代の流れは変わりつつあることを思わせる。新潟でも、「政治は男衆のもの」から「父ちゃんにばかり任せておかんね」という方向に、徐々に変化してきている。稲村候補の圧勝も、「土井ブーム」や女性の意識の変化⇨投票行為の自立と無関係ではない。その引金になったのは、生活に密着していて、分りやすい政治テーマだった消費税である。しかし、これのみをもって、女性たちの変化は語りつくせない。その背景には、女性の社会進出と自立指向という「時代の波」がある。

「わが心のシンボル」

二年前に火のついた「土井ブーム」は、起ころべくして起こった現象である。労働女性の増大と、女性の高学歴化、一九六〇年代後半のウーマン・リブの波、一九七五年の「国際婦人年」を契機とする「女性の自立と社会参加」という思想の拡がり、一九八〇年代に入ってから「女性差別撤廃条約」の批准とそれにもとづく「女性行動計画」の作成。そして、「男女雇用平等法」制定要求運動の高まり。世界的な女性解放運動は、この二十年間で着実にポイントを稼いできた。資本主義制度を前提とする限り、その解放には限度もあるが、先進資本主義国ではもともと女性解放の遅れた環であるわが国にも、この世界史

の流れは大きな影響を与えた。「性別役割分業思想」の見直しは、主婦層へしだいにひろがってきている。

マスコミも、一九八〇年代に入ってから、この問題をまじめに論評するようになって、広汎な女性層に問題を投げかけてきた。

市民運動に立ち上ってきた女性や、社会参加や自立を「心の底」で希求している主婦層にとつて、土井委員長は「わが心のシンボル」となったのである。社会進出した女性の壁は「男のつくった」社会のしくみであり、土井さんは、「男の支配」をつきくずす旗手ともなって崇められている。こんご進むであろう女性の本格的な「政治参加」の走りを、一連の選挙で予感した。

◇岡山の仲間からの報告◇

「連合」でなく社会党こそが逆転の原動力

今回の参院選挙闘争で、全国の仲間から注目された岡山選挙区の状況等について報告します。

出遅れた選挙闘争

秋山参院議員の高齢による引退発表を前後して党県本は、次期候補に松本氏（県評議長）を昨年五月の大会で決定。その後一二月に本人が「健康上の理由」で辞退するにいたり、選挙を重ねるなかで今年四月一五日の党県本大会で、「森のぶ子」を党公認候補としてやっと決定できました。

そして岡山市選対会議では、この選挙に勝つためにこれまで一部で取組まれていた学区選対を全体で組織化して闘う提起がされたものの、期間が短いこともあって労組などからムード選挙が主張され結局意思統一が充分にできなかったが、労組の協力を得て態勢づくりと運動を進めてゆくことになりました。

五月二日に選挙事務所開きが開催されるとともに選挙本番への準備や態勢が確立されてゆく状況であり、たいへん出遅れた選挙闘争でした。それだけに陣営では出遅れをとりかえすのに必死であったし、婦人候補ということもあって「婦人が前に出て選挙を」ということでの婦人選対の組織化とそろいのTシャツとスカートでの「おばちゃんパワー」が街頭で発揮されたり、土井委員長の二度の来岡などとあわせて「追い風」にのつての社会党森の浮上になり、選挙終盤まで当落線上で自民・片山、連合・高原、社会党・森の三氏の争いという状況でした。

連合支持に批判も

他方連合陣営の動きについては、選挙前の候補擁立について「高原」が見え隠れしながら社会党に「統一候補」の申し入れを行っています。そして社会党が松本氏公認を決定する大会では電通代議員等がボイコットしたり、公認後も松本おろしを裏で画策したのが連合陣営でした。

連合陣営は結局、民社・社民連・公明の三党と、労組では同盟を中心にした支持団体で、総評系では全電通・全通（一部）・合化（一部）が支持にまわっています。

このなかでの特徴的なことでは、全電通の組合員の間には「これまで社会党を支持してきて今回連合支持とはどうなっている。おかしい」という声も多く出され、県支部オルグのなかで班長から不満が出され県支部も説得できずに帰っている例もあります。また全電通の組合ニュースには高原支持の記事とその下にN T T経営組織改革合理化の記事を掲載しても比例区には何もふれていません。また投票日の出勤者は民営化前は勤務解放などで投票が出来ていましたが、民営化後、N T Tは出勤者に「休暇をとれ」とか「不在者投票を」という対応に組合は何もしないなかで、出勤者で投票を棄権した人が多くいるということです。

そして全通では、社会党支持を地区本部大会で決定していましたが、途中から連合支持を決定し、この決定について問題があるということと中央・貯金・日通・備中北の四支部が地区本部に申し入れを行い四支部は社会党森候補支持で選挙を闘っています。また組合決定に従った支部でも動いたのは役員・活動家クラスであり、しかも「高原」で選挙をやっても投票は「森」という状況になっていたそうです。

そして地区本部のK委員長は、高原支持を決め連合を落としたり辞任するということをマスコミに話していたこともあって、今後の動向に注目してゆくことが必要です。(なお、本人は「おれはマスコミが勝手に書いている」と話しているが。)

こうした状況のなかで、公明が「推薦」について連合が強いと言われていたけれど結果的には、社会党森候補が当選、連合高原候補が落選ということに結びついたと考えられます。

いくつかの反省

社会党が勝つてよかったわけですが、私たちなりにこの選挙を通しての今後の党強化の課題をはっきりさせなければなりません。その意味から二・三点にわたって考えていることを述べます。

一つに、党としての組織的な選挙になっていない状況であり、市民運動的な傾向が強くなっています。こうした状況は前回の参院選以降、この傾向が生まれていることです。

二つめには、労戦統一と選挙の関係です。普通ならば労戦統一支持の労組は連合候補で選挙を闘うことになるはずですが、労戦統一支持の組合(私鉄・全たばこ・全日通など)が社会党支持で選挙を闘ったことをどう考えてゆくかということです。

三つめには、組織労働者の動きがたいへん弱いなかで、しかも選挙期間実質的には一ヶ月少しというなかでの社会党の勝利です。郡部で本隊車が通れば、夕方の忙しい時間でも家から人が飛び出してきて手をふったりしています。またある仲間の両親ですが「これまで自民党支持でしたが、今回母が『誰がやっても同じだ』という話しに父が『今回は社会党だ』といいあらそっていた」という話しに象徴されるように、消費税・リクルート疑惑など反自民のムードが広がっており、これを反独占に結びつけながら継続的な社会党支持にしてゆくための大きな課題が全国的にも問われているし、求められているということです。

以上、岡山での選挙を通じてつかんだ状況等の大まかな報告とします。私自身も今後の党強化にむけてさらにながらばってゆきたいと考えているところ です。

行政「改革」で矛盾は激化

選挙闘争で考えたこと

消費税導入にノーの審判

七月二三日投票の参院選は、社会党の躍進、自民党の大敗、他の政党は伸びなやみ、という結果が数字に出ました。自民党のエラーによる社会党の得点であったという考えを全く否定はできないのですが、しかし、社会党が消費税に反対し続けることがなかったら、このようにはならなかったと思うのです。

今選挙の争点は、消費税、年金改悪、農産物自由化、そして、リクルートでした。そしてこれらは「行政改革」の産物であります。老人医療の有料化、人勧凍結、定年制導入、退職手当の削減、賃金表の改悪といった公務員労働者への攻撃、国鉄等国民の財産の民営化、健康保険の改悪、^①の廃止、生産者米価の値切り、福祉予算の補助率十分の八から十分の五への定着化、等といった「行革」の中の消費税導入にがまんしがまんを重ねた労働者・勤労国民は、ついに自民党に「ノー」といったのです。

歴史はおしえている

封建制社会の江戸時代にも、享保の改革、寛政の改革、天保の改革という三大改革が行われた。これは、まさしく「行政改革」であって封建制社会のため直しのために英知を集めた努力がされるのだが、改革のための手段は、さらに改革のための手段を必要とし、矛盾は拡大し、ついには、封建制社会は、資本主義社会へバトンタッチをせざるを得なかったのです。

そこで、私達の学問すべきことは、日本資本主義の発達の歴史のなかで、「行政改革」をどのように位置づけるかということなのだと思います。「行政改革」は江戸時代の三大改革と同じように、行ききずまった社会体制を再建するための「行政改革」なのです。

第二臨調の第一次答申の冒頭の下りを入れておくことが大切と思うのです。
「今日の日本の経済的・社会的発展はめざましい。明治以来わずか百余年で、また戦争の廃墟から立ちあがってわずか三十数年で、日本は世界の先進国と肩を並べる近代的な社会を作り上げることに成功した。

だが反面、ここ数年の政府の財政は危機というほかはない状態に陥っている。行革は国も地方も待ったなし」という標語にも示されているように、財政の危機に触発されて、いまや行政改革は国民の声となった。」(一九八一・七・一〇)

この提起について、私は次のように問うてみる必要がある、勉強して見る必要があると考えるのです。

- ① 資本主義社会日本が経済的に発展するとはどういうことなのか、このことは、労働者・勤労国民に対して何をもちたらすか。
- ② 八一年度末で国債発行残高は八二兆円でした。まさに財政危機でした。そして、八八年度末、その残高は一六三兆円にもなっています。なぜ財政危機となり、そして「行革」の七年間で国債発行残高は二倍にもなり、今年も国の予算の二〇%以上が国債の返済にあてられているのはなぜか。このことと、消費税をどうとらえるべきか。

なぜ、このように言うかという点、この点を大衆の前に明らかにし、その上で、政策をかかえてゆくのでなくては、社会党に未来はないと思うからです。生活感覚、生活の大変さから、消費税の自民党に「ノー」と言い、農産物自由化の自民党に「ノー」と言った人々を、本来の意味での社会党の支持者になってもらうには、時間がかかっても、社会党自身がこうした理論的訓練をしなくてはならないと思うのです。社会党はこうした力に全く欠けているように思うのです。

オキエーに「燎原の火」ダネ

今回の選挙闘争中の自民党の主張の中に、私達が何を学習すべきかを示唆しているものがあると思うのです。

まづ、長野地方区の下條進一郎は、その松本の事務所開きの時、「我々は、自由主義経済体制を何としても守らなくてはならない」と訴えたようです。また、長野四区衆議員の村井仁の政治報告会に來演した堺屋太一は「自由経済体制の良さを認識しなくてはならない」と言ったそうです。そして、宇野首相の選挙戦の第一声は「自民党が自由経済、自由社会をつくって来た。一時の感情で投票を誤らないでほしい」でありました。

そこで、我々はこうした人々の考えに対して、次のように考え、そして学習し、理論武装すべきでしょう。

「自由主義経済体制＝資本主義社会体制を守るためには、行政改革をどうしても遂行し、成功させなくてはならない。そして、憲法も変えなくてはならない」というのが、自民党・財界の主張でした。行革は押し進められ、消費税、農産物自由化のところまでたどりつき、国民はさすがに「ノー」と言ったのです。

ですから「私達の住んでいる日本＝自由経済体制＝資本主義社会とはどういう社会なのか、人口の九〇％以上をしめる労働者・勤労国民にとって何をもたらす社会なのか、資本主義が発展するとは、どういうことなのか」ということを、私達自身が本心に学習しなくてはいけないし、学習した理論を身につけてはいけないと思うのです。

都議選で自民党の大敗のわかった時、経団連の斉藤英四郎会長は「都民は、社会主義を選んだのではない。自民党にオキエーをすえたのです」とコメントしました。都民は、そして参院選で国民は、社会主義政党である社会党へ投票したというより、くさり切った自民党にオキエーをしたという見方も、半ば正しいと思います。そして、オキエーの火の中に、資本主義日本列島を焼きつくす「燎原の火」ダネのあることに、私達は考えるべきです。

資本主義社会は、その反ヒューマニズムの姿を、もっともつと大きくしてゆくこと、それ以外に生きのびれぬことをますます多くの人にわからせてくれるでしょう。「行革」を進めるにしたがって。

社会の本質を知る

資本主義社会のしくみはどうなっているのか、このことを基本的に正しくおさえておくことが、これからますます必要です。

労働大学から出ている二つのベストセラー、『経済学入門』（七〇〇円）、『労働者の世界観』（七〇〇円）は何十回となく読むべき本です。さらに関心のある人には世界の古典中の古典『資本論』があります。「資本主義とは何か」、このことを労働者・勤労国民に啓蒙し、広めることこそ私たちの大きな任務です。

「社会党の抵抗性」という「源泉」

なぜ選挙で勝てた？

社会党が、なぜ「大勝」したのか？ すでに言われてきていることは、消費税などの「三点セット」プラス・スキヤングルなどによる敵失・追風・お灸・マドンナ…論などであるが、土井委員長も「党の主体的力量で勝ったのではない」と断言していた。土井さんの政治感性の鋭さを示している。このような総括に対して「地殻変動論」なるものがある。字づらが示すとおり質的变化をいい、願望している。その論拠は、「三点セット」とはいうものの、そのいずれも支配層の構造矛盾から起ったものであり、これに対して土井さんを先頭に真向からたたかってきたからこそ地・変を起したというのである。以上、二つの意見が、討論をつづける中で、いまは、「敵失論」などを主要に、「地・変論」を相乗させることに落ちつきつつある。

しかし、それだけでは、一体、国民が、なぜ選挙のたびに一千万票前後を投じてきたのか。なぜ今回は他の野党をへらし二千万票も社会党に託したのか。またなぜ土井さん先頭の領導（ヘゲモニー）を、あれだけ支持したのかについて、その根っこどころは「源泉」がよく見えない。私は、その「源泉」をどうしても強調したい。「源泉」とは、社会党の歴史——とくにその中にある「社会党の抵抗性」という作風と路線である。「社会党の抵抗性」は、戦後は例えば「護憲」の社会党として国民は体験してきたし、戦前は「無産運動」の評価までさかのぼる。それこそ「いのちとくらし」の経済闘争から、「世直し」の政治闘争に至るまでの、粘り強い「抵抗性」の歴史である。まことに社会党の財産といえる。岡山で、県民は「連合」よりも「社会党」を勝たしたのは、この「抵抗性」という「源泉」がものをいいた。

それらを培ってきたのは、堺——山川——大内（兵）——向坂——鈴木の諸先達から、なお多くの労農潮流の氏名をあげられるが、河上——浅沼日労系も真摯であった。近くは佐々木——成田——飛島田——石橋と、当然ながら党内の弱さを体現しつつも、そして、今日、土井委員長にまとも上って（止揚）いる。これら指導者たちも「抵抗性」を継承してきた。岩井「全労協」創立者もその一人である。

さて、その「社会党の抵抗性」を全国的に牽引してきたのが、左社潮流である。左社潮流とは、党内左派・良心左派・正義感旺盛な党员、フェア・プレイを希求する党员たちであり、彼等は、「党建協」の内外で「抵抗性」を粘り抜いている。そしてその中でも、「源泉」の湧き水のように、そしてその汲み手としての協会や労大や社青同など——そしてそこから発する「社会主義」「まなぶ」「月刊労働組合」「青年の声」などがある。なおこの「社会通信」や「唯物史観」、「社会科学」などがあり、その影響下に、国労や日教組、自治労などの中でどころある労働者が党を下支えし、今後も支え続けるであろうということである。この名もなき活動家たちは、今日も社会新報をもって走り、選挙でも手弁当で頑張っている。この諸組織と活動家が、以上のような参院選の総括で、より社会科学への確信を強めるかどうか極めて重要である。それを左社Ⅱ労農潮流が包み、さらに農民、勤労国民が支える、——その作風と展望が、今後の社会党と来たる衆院選の決め手となる。

「源泉」には、汲めどもつきない湧き水がある。MELISという湧き水が…。マルクスは「人間的」を非常に強調した。そして「抵抗性」を相乗させた。弁証法を「源泉」に…。

（佐々木 守雄）

参院選から京都市長選へ

〈社会党は言うこととやることが違う〉

参院選投票日、自民党支持者だったという年輩男性より怒りの声が社会党によせられた。「わしは今まで自民党しか入れたことがあらへんが、今度は社会党にしようと思って、町内から一五人つれてった。みな選挙なんかしたことの無い連中や。ほしたら自民党と共産党は出てたけど、社会党は一つも出てへんやないか。ササなんとかというおぼちゃんが出てたけど……。土井さんは反自民・消費税廃止で社会党は断固闘うノ言うてはるけど、候補者も出さんと、言うこととしてることが違るとるやないか。投票所に行つてからみなウロウロして、自主投票になつてしもたノ！」

連合笹野候補圧勝に酔いしれ、勤労国民の社会党へのなみなみならぬ期待という、本質を見失つたり笑いとばすことはできない。せつかくのチャンスを生かせなかつた社会党の責任こそ問われるべきだろう。世の中は「連合ブーム」では決してなく、「社会党ブーム」だったのであり、衆院京都一、二区とも議席を失つているが、当面の競争相手は民社・公明なのだから。

〈今こそ社会党は態勢固めを〉

また労働者の期待は、労働組合にも寄せられてくる。「社会党はせつかくのチャンスなのにあんな書記長おいとつたらあきまへん。土井委員長はたいしたもんだからあれでええけど、書記長は若いしっかりした人にせんと、やつとうまいこといったのにパーになる。自民党なんか橋本幹事長みたいなおいてバリバリやつてる。やられてしまいまつせ。(このことを)社会党の京都にも、本部にも言うたけどとりあつてくれない。あんたんとこならんとかしてくれる思た」と。

また、今次選挙の「主役」であつた「ノンポリの主婦」は候補者選びをこうした。

「新聞見るとと笹野さんは大丈夫みたいだから、自民党を一人でもへらしたほうがいいから(そしたら消費税をなくせるから)共産党の佐藤昭夫さんに入れるわ。」

きわめて自らの一票を有効に使うとしてゐるし、判断も健全なのである(われわれのように「苦渋の選択」などしてゐない)。こういうウーマンパワーのおかげで、落選はしたが共産党佐藤候補は、共産党の比例区選挙より七九、一三五票多い、率で言えば六・八%も多く得票をしたのである。過去と比べて遜色ない。だから有権者は他の野党の過剰批判や中国問題の拘泥にはへきえきすることはあつても、興味はもつていなかったのである。

野党第一党の社会党が反自民全野党共闘路線を堅持して、闘う態勢を固めることこそ今、求められている。

〈連合も全電通も面子丸つぶれ〉

参院選直後から目まぐるしく動き出し、告示前日ようやく「政党パターン」の決まつた京都市長選(八月二日・告示、二七日・投票)こそ圧巻であつた。社会・中野、共産・木村、自公民・田辺、全電通など・城守と四極になつた。社会党は参院選での圧勝からくる自信によって急に主体性を発揮し、自民党、連合京都、全電通を中心とする「京都総評再建協」三者いずれの「アメとムチ」もはねかえし、八月八日の党府本部委員会の一票投票で城守前助役をやぶり、病院長・中野を決めたのである。連合京都の「第三の候補者選び」も名前を挙げておきながら失敗した。社会党内の「全電通神話」も崩壊した。本紙が読者の手もとに届くころには「平成・京都夏の陣」も結着がつき、労戦決戦の「暑い秋」が始つてゐることだろう。

(京都・M)

党建協・第三回総会・記念講演会に参加しよう

巻頭言でもふれられているように、党建協は九月二五日(金)午後一時から二六日(土)正午まで、全国交流集会、第三回総会、記念講演会を開く。政治情勢が新たな段階に入った今、積極的な参加をよびかけたい。

一、全国交流集会、第三回総会

(1) 日時……一九八九年九月一五日(金)午後一時から一六日(土)正午まで

(2) 場所……東高円寺会館(地下鉄丸ノ内線、東高円寺下車)

二、第三回総会の報告と記念講演

(1) 日時……九月一六日午後一時から四時まで

(2) 場所……中央労政事務所、第一会議室(飯田橋セントラルプラザビル、十一階)

(JR線飯田橋駅前、地下鉄有楽町線飯田橋駅上)

(電) 〇三―二三五―一一二五

(3) 講演……序「岡山から参院選と日本をみる」 元参議院議員・寺田熊雄氏

「政治動向と背景をどうみるか」 朝日新聞編集委員・国正武重氏

三池炭鉱七〇〇人の首切り合理化

七月二六日三池炭鉱は組合に対し、七〇〇名にのぼる首切り合理化を提案してきました。

一九八七年第八次石炭政策が強行され、以降二年間で約一、七〇〇名が首を切られ、今回の首切りが強行されますと二、四〇〇名で、下請、関連会社等を含めますと三、〇〇〇名をこえる労働者の首切りとなります。

一九八〇年より、体制的合理化である国鉄の民営化をはじめ行革合理化を日本独占・自民党政策は一体となり強行してきました。

石炭産業については、前川リポートによる産業構造調整として「自助努力による自由競争」として、国内唯一のエネルギー資源である「石炭」を切り捨て、安い海外炭の輸入をすすめる方針の石炭政策を強行していますので、国内炭の生産が縮小され、しかも安い石炭を生産するために残った労働者には低賃金と労働強化が押しつけられ、まさに生産第一主義の労働が強制されることとなります。

一九六〇年、三池闘争が闘われ一、二〇〇名の仲間の解雇を阻止することはできませんでした。

その後三池炭鉱の合理化は「炭鉱が生き残るため」と言って低賃金と労働強化の合理化によって、死亡災害が激増し一九六三年三池大災害が起こりました。

このようなことから、今回の首切り合理化は、首を切られた者の再就職の道はない、首切りをまぬがれても、生命がけの労働が強制されることとなります。

労働者が人間らしく働く、生活する権利を奪う自民党や三井を許さない闘いをすすめます。

社会党の「基本政策」転換を許すな

参院選直後から予想されていたことだが、政・財・官・労・マスコミから社会党への基本政策「転換」への圧力が強まっている。

第一に財界。日経連会長は恒例の軽井沢セミナーで「社会党は規約や綱領に社会主義革命を行うと書いており、(現実路線は)世論を引き込むためのカムフラージュ。衣の下にヨロイがのぞいている」「政権獲得のため表づらをよくする必死の努力をしているが、社会党は西欧型の社会党ではない。自由主義の枠内で改革するかのような報道もあるが惑わさるべきではない」と述べた。

他方、経団連副会長や旭化成の宮崎のように、「日本の社会党は韓国を認めないとか、よくわからないところがある。西欧的な社民党に変わっていくのかどうか。半分は期待、半分は不安というのが、偽らざる心境だ。英国の労働党だって、米国の労組が支持している民主党だって、財界で支援しているのはたくさんある。西欧では社会(民主)主義政権の方が数が多い。今後、社会党の変化に注目する」との考えから、「二大政党が望ましい」との意見もある。だが自民党の衆院での過半数割れが確定したわけではない現在、財界の総意は日経連の主張にあらう。

第二に自民党。社会党問題でもっとも積極的な主張を展開しているのが政調会長の三塚だ。彼は、自民党が総選挙で過半数を割ったら、「自民党は野に下るべき。政党政治の基本はそういうもの」といながら、社会党に「安保、原発、朝鮮など一つ一つの政策について明確な回答を出せ」とせまる。

第三に野党。存亡の危機に立った民社も、社会党全国書記長・選対委員長での山口見解(今後は「批判党」的政策から「政権党」政策への鮮明な政策をめざすとの観点から、日米安保条約は外交の継続性について維持等と述べたこと)にたいし、「当面は継承する」というが、当面という意味がはっきりしない。「連合政権の基本政策では、日本が西側陣営の一員であるとの位置づけを明確にする必要がある」とせまる。民社に発言権なしとみた公明党は、政府自民、財界の総意を反映するかのようになり八月二四日、社会党に公開質問状を發した。

それは(1)山口見解の「日米経済関係重視」と「対米偏重外交を是正し、全方位外交を目指す」は矛盾していないか、(2)東西関係における日本の位置づけをどう考えるか、(3)「安保、当面維持」の「当面」の具体的期間は、(4)安保条約への基本的認識・評価を意図的に回避しているのではないか、(5)社会党固有政策の「非同盟・中立」と「安保、当面維持」は矛盾しないか、(6)自衛隊は固有政策では違憲、連合政権下では合憲なのか、(7)自衛隊への基本的認識、評価をどう考えるか、というもの。社会党の基本政策の全面転換をせまっているのが特徴だ。

第四にマスコミ。財界の総意をもっとも忠実に反映する「日経」は、八月二四日付の社説「社会党はもっと現実的な政策を示せ」でこう述べる。

「野党の中心勢力として政権を担当する気なら、連合の堅山会長が二三日に主張したように政策面で『もっと割り切り』、現実的な政策を示すべき」「安保維持・自衛隊の存続」との方針は、…非武装中立、自衛隊の改組・縮小という縦糸の政策との関係は明確とはい

えない。こうした点について、連立相手の公明、民社両党の疑念をねぐわない限り、国民多数の共感を得るのは難しい」としたうえで、「わが国の政治は大きな変革期にある。社会党は飛躍をめざすならまず自己革新を図るべき」と。他の全国紙も大同小異だ。

社会党の基本政策転換をもっとも露骨にせまるのが、連合のダラ幹連中だ。社会党の右傾化にもっとも大きく貢献し、それだけ自民、財界の評価も高い全電通委員長は大会で「基本政策の一層の見直しをはかれ」と、(1)社会党が防衛、外交、エネルギー等に関する基本政策について、新宣言をふまえ、「政権をめざす責任政党」としての現実的見直しを行うことを強く望む、(2)連合政権は日本共産党とは明確に一線を画し、閣外協力も求めない立場に徹せよ、(3)保守系リベラル派も国民連合政権のパートナーに考えよと述べた。

全電通に負けてなるものかと、さらにハッスルしたのが連合会長。この人は日経連軽井沢セミナーで「韓国への対応と原発にふれていない。大胆なわりきり方が必要」と山口見解を批判した。この人は参院選直後のある労働専門紙とのインタビューで「社会党は大胆な決断が必要」との内容を次のように述べていることをつけ加えておく。

「日米安保条約の即時廃棄を掲げては政権交代はできない。日米安保条約を認めたいので、将来はどうするかを検討するというふうにわりきることだ。自衛隊の合法、非法論も不毛の論議だ。東西関係は対決から対話の時代に入っている。軍事費を削って国防基金としてプールし、環境、社会基盤の充実に充てるということを国際的に論議することだ。原発もエネルギー源の三割を依存している現状の中で、すぐなくすことはできない。安全第一、情報公開に全力をあげる。同時に原発に代わるクリーンなエネルギー開発に努力し、問題の多いエネルギー源の比重を少なくする」

これは連合の三原則、「労働組合主義、ICFTU加盟・反共・反社会主義」の理念、そして今日の世論の動向そのものだ。

民社は参院での土井首班指名に白票を投じた。党内の意見調整ができなかったためだ。連合も政党支持では意志統一は困難。それだけに、社会党への「基本政策見直し、転換」の圧力は強まることは必至である。

このうえ、新「連合」加盟を強行する日教組、自治労は社会党の議席数で連合内の同盟・JC、総評の力関係の転換を求めることも必至。社会党内左派の動向が問われる。

◇ 編集部だより ◇

▽千葉の石井薫さんから著書『一二年目のバッチ』を送っていただきました。強靱にして柔軟な闘いを」との揮毫(きこう)に心を打たれました。書評は次号に掲載します。読者のご講読を願ってやみません。定価は千二百円。お申し込みは社会通信社か、石井さん宅(千葉県船橋市薬田台三一一三〇、電話〇四七四一六六〇四五九)にお願いします。

▽情勢は面白くなってきました。都議選、参院選の勝利を、労働運動、社会党強化にどうつなげるか、それがカギです。そのポイントは、九月六日付発行の「号外、われら今、何をなすべきか」に究明されています。ご講読を願ってやみません。

▽いつものお願いです。社会通信の読者をご紹介ください。読者のみなさんの活動、ご意見を寄せてください。

◇ 読者からのおたより ◇

号外を送って 神戸、兵庫区の地でも参院選総括論議をふまえ、「われら、これからいかに闘うか」を模索しています。中小労組への組織破壊攻撃は「連合」加盟動向とも相まって、シレッさを加えていますし、闘う労組の旗を守ることが、社会党を守る闘いと表裏一体という状況になっています。そこで九月一四日に地域では初の「社会主義講演会——ま社会主義を考える」を、社会党、社青同、婦人会議、労大まなぶの共催で開催します。また九月下旬には党合宿でみっちり学習、論議を深めたいと考えています。幸いにも、選挙を前後して二名の若い仲間の入党もあり、仲間の間にヤル気もでていきます。「号外を活用できれば」と考えているしだいです。

(兵庫・F)

号外はグッド・タイミング 貴通信の八月二一日号にのっておりましたが、「号外」を出されるとのこと。まことに時宜にかなったことと思います。〇〇部送ってくださるようお願いいたします。お身体に気をつけてがんばってください。

(山形・M)

東京にきて四ヶ月 長い間、馴れ親しんできた郷土(北海道・北見)を離れ、怒りと苦しみを持ちながら東京の地に来て、はやくも四ヶ月が経ちました。見る物、聞く事、すべて体験することが驚きとまどいの生活、ハッキリ言ってまだまだ心身ともに不安定な状態がつづいています。その上、五月八日には強制出向という、まったくの非人間的扱いを受け、私などは早くも?というか、嚴重注意処分と夏期一時金〇・五%カット処分。こちらに来ても攻撃の嵐は止みませんね。本当に許せないし、闘い続けるしか道はないですね。

話を本題にもどしますが、先日連絡したように、私の住んでいる寮にも広域で来た仲間の中に「通信」の愛読者がありまして、できたらみんなで取り扱いを一本にした方が、「通信」の方々にもよいのでは?ということになりました。下記に一括してお送りください。なお新しく二名が購読することになりました。

(東京・U)

運動低迷の克服を 第一声。運動として我々の労働条件を向上させることは何一つできなくなっている全通ノまず運動の低迷をどう克服するかである。

(全通・C)

時間外のない職場に 先の「日刊みんな」に「残業はしたくない」と書かれたのを読んで、「本当に残業はしたくない」と同感する一人です。しかし、看護婦の中には「現状を考えろと仕方がない。働いている以上やらなくては」と思っている方もいると考えます。時間外が毎日あること、このことが問題であることに看護婦自身が気づき、運動をつくりあげていくことが何よりも増員確保の要因と考えます。「時間外のない職場に」。

(「みんな」七・三)

自治労の仲間に勇気 七月二八日の自治労集会(本誌四二二号)、盛会でした。なかでもビックリさせられたのは、「自治労の(連合加盟) 批准反対」「全労協志向」が述べられていたことです。それについても自治労の仲間の奮闘ぶりに、敬意を表したいと思います。

(日教組・M)

◇ 灰原 茂雄氏と語る ◇
 「友情は人生の花である」をわがものに

『三池と向坂教室』、編集を終えて(一)

地下の先生に笑われないように

編集部 独占資本家たちが労働運動を語る時、「三池闘争が転換点」との認識です。ど
 の本をみてもそうです。この本は「長期抵抗路線」のひろがりです。終わっています。その
 「長期抵抗闘争」の伝統をもっともよく受け継いだのが国労ですね。

灰原 反合研で、あの西ヶ原寮で夜遅くまでやりましたね。私もまだ若かったが、国労の
 同志はみな本場に若かった。あの「マル生」では本場に必死だったもの。

編集部 だれだったか「反合研に出るとホットする」と感想を述べられていたことを、私
 は一生忘れないと思います。

灰原 当時は先生も若かったですものねえ。

編集部 国労闘争はこれからです。

灰原 いやいやこれからですよ。国労闘争を本場の意味で階級闘争としての労働運動に仕
 上げるかどうかは、これからの私たちの任務だと思います。とくに若い人たちを含めて、
 こんなバカなことはいないんだからガツカリしないで力を合わせてやり上げなければならな
 いと思います。「あんなに教えてやったのにまだまごまごしてるのか」って地下の先生に
 笑われるでしょう。

仲間へ愛情を

灰原 先生から学び返したもう一つは、仲間を大事にするということです。ちょっとした
 意見の違いですぐヨソヨソしくなる。たとえば、今日の味方は明日の敵になるというよう
 にね。先生は「悪いことは悪い」とハッキリおっしゃったでしょ。だからひじょうに厳し
 い面があるんです、外見的にはね。どうもそこばかり見習っている気がして困る。仲間
 同士で忍耐強く……長期抵抗するのは敵にたいするだけじゃないもの。味方にたいしても
 長期抵抗で、粘り強く説得し教育し面倒をみていっしょにやっという、いわば内
 側の長期抵抗についても先生の書簡から痛切に学び返したということになりますね。

もう一ついえば何かといいますと、お互いに批判するだけじゃなく、仲間を評価して大
 きなものに仕上げていこうという真の愛情も、それではでてこない。仲間のなかの有力な
 者をひっぱりだして、彼を押し上げていく。つまり団結してたたかうという姿勢ですね。

それは向坂先生がおやりになったように、鋭く間違いは間違いだとしてピシッとたく
 ことを否定するわけでもなんでもない。深く考えて、本質的に階級闘争の立場から批判す
 ることは当然ですけれど、もっといえば階級的な愛情ですね。人間、労働者にたいする友
 情というか愛情というものを、もういっぺん先生から学び返さなければ、とてもじゃない
 が今日、反独占のたたかいを下からくみ上げることはできないんじゃないか。そういう意
 味では先生からいかに仲間を大事にするか、コケタ仲間もいるしちよつと足を踏み外した
 仲間もいる。そうした仲間こそ手厚くこまめに面倒をみていくという構えを、あらためて
 学び返しましたね。

つまり、先生はよく色紙に「友情は人生の花である」と書かれましたね。その意味です
 よね。

団結は苦勞してつくられる

編集部 少し立ち入ったことになるかとも思うのですが、向坂先生に戦術等について相談されたことはあるのですか。

灰原 三池闘争が始まる少し前ですから、昭和三四年でしたでしょうか、これは本にも書いたことですが、「三池闘争も必至」という寒い一月か二月だったと思います。大牟田駅に先生を迎えに行つて、いっしょに夕食となり先生からおすしをご馳走になったんですよ。今でもある駅前の大きなすし屋さんです。

そのとき先生に「いよいよ三池闘争はこれからです」、大闘争になるのは必至ですから「これからどうしたらいいでしょうか」と聞いた。戦術の指導についてはあまり先生にお願いしたことはなかったのです。しかし心配でしたから聞きました。

そのとき先生から学んだことは、「灰原君、君は書記長として裏表知っているんだから、大田さんや岩井さんだけじゃなくて中央の単産の幹部に必要なときに手紙を書いて送れ」とおそわったんです。先生も気にかけておられたんですね。

三池闘争中それを実践しましたよ。しかし手紙書く暇がないときもあるでしょう。そうしますと、明日まくピラを一枚入れて、そのピラのすみに「これは明日まくピラです。中味はこういうことです」とペンで書き入れて、全部速達で一番多いときは十何通だしましたよ。それを先生に学んだとおりました。

そういうことを考えますと、よく口では団結といいますが、苦勞してがんばっている仲間を支えて激励するとか情報交換するということがなければ、今のマスコミを中心にした社会のなかでは大きな流れに負けるにきまつてますよ。しかも連合など労働者の大切なこと、たとえば国労などの不当労働行為をちつともふれない機関紙を押しつけて、「全統一」といつているだけですからね。

こういう流れを考えますと、ぼくらは手紙を書いて仲間へ訴えることも旧くさくみえるけれども、心情をとおして、心と心のふれあいの一助として手紙を書く。そのことの延長として「社会通信」だとか「社会主義」「まなぶ」にどんな原稿を書くことですよ。まだ少ないですよ、たまたかっている国労の仲間でもまだ弱いですよ、そこが。

そういう意味では「団結」とはもつと苦勞しなくちゃできませんもの、ただ激励することだけじゃなく、めんどろですけれど手紙を書いたり、ピラをはさんだりね、暇をみて実情を訴え共感を得て、いっしょにスクラムを組もうということです。先生から学んだ「手紙戦術」を思い起こしながら今度の書簡集をとくに石河さんの力を借りてやって完成させました。

とくに今の若い人たちは電話ですもの、すぐ電話でしょう。世界一の企業になっちゃやうは、NTTは。電話は無責任です。すぐ消えますから。テープで録音する人は少ないでしょうしね。電話はその場かぎり、手紙は残りますからね。今度の書簡集で、「アイタノ灰原さんのような人は一人だけじゃない。手紙を全部とつといてあとでバラされるんじゃないか」と思うような人もあるかもしれないけどね。それでもいいと思うんです。

その時の歴史的な気持ちや大事にする、昔書いた手紙を見て自分自身をチェックすることかということもありますから、ぼくはもう少し筆まめにお互いに交流することがないと、これからの日本の労働運動は再建、強化できないと思えますよ。独占資本じゃやれないことをなにか一つくらいやるしかないですからね。足を運ぶとか手紙を書くというように……。独占資本なみのことをやつとつたんではダメですよ。テレビのスポット広告といつ

たつて一瞬の間ですからね。むこうにとつちや、カスリ傷にもならん。やはり一人一人を大事にする運動をもういっぺんやり直すという意味で、今度のことは私自身が学ばされたということもありますね。

団結強化は組織づくり

編集部 団結の再強化、組織づくりということですね。

灰原 そうです。今の若い人にはふるめかしいことだと思われるかも知れませんが、これは大事なことだと思いました。つまり団結の再強化です。団結とはどうして出来るのか。演説で団結は強化されませんからね。組織づくりです。組織づくりは手の問題ではありませんからね。現状を訴えてちよつとでも分かつてもらうことを、組合員一人一人がやるような工夫をしないと。

「社会通信」はよく投書がありますね。「のせられないくらいだ」との話も聞いたことがあります。これは現場でよく読まれているということだと思えますよ。大事なことです。ちよつとしたことを書いて伝える、このことこそはわれわれが団結する武器です。こういうことも『三池と向坂教室』の往復書簡から学んでほしいと思えますね。

「テーゼ」の再読を

編集部 それにしても「手作り」の運動が少なくなりました。国労くらいでしょうか。こんな状況では連合批判も本物にはなりません。組合民主主義の真の意味を身体で感じとれませんか。

灰原 民主主義の砦は労働組合です。向坂先生の著作に『わが生涯の闘い』があります。そこで先生は「民主主義の最後の最強の砦は労働組合だ。しっかりせい」というようなことを言われている。労働組合はもういっぺん向坂先生の足跡に学んで、再度団結を強化して民主主義の取手を守りぬく。相手は連合ですからね。幹部闘争で組合民主主義がないだけではないですから。ですから民主主義闘争について下から、たんなる反幹部闘争だけじゃなくて——組合民主主義といってしまうとつい手の問題になっちゃうんですよ、「会議はやりました」「賛成多数でした」と、これで終わっちゃいますから。

本当に大衆の声を聞いてやっているのであれば、けっして連合なんかには統一されません。連合は幹部闘争の標本ですからね。そこで改めて反省しなければならぬことは、社会主義運動に直結している民主主義闘争をもつとやらにやいかんことです。そういう意味で私は、協会の「テーゼ」をあらためて再評価しますね。よく「読んだ読んだ」といわれますが、もう一度読んでもらいたい。読んでない人もたくさんいますから。

あそこでは平和革命の一番基本的なたたかいは、資本主義下における民主主義のたたかいの強化に努力することだといっている。そこであらためて、わが協会の「テーゼ」の正しさを若い人たちにもう一度読んでもらいたい。いかに革命をやるかは、いかに人間、労働者の解放をかちとるかという問題ですからね。

徹底的な民主主義のたたかい

編集部 最後になりますが、現在の労働運動をどうごらんになりますか。

灰原 不思議ですね。社会党の国民会議でも「民主主義のルネッサンス」とまでいっているんですよ。女性の問題、リクルート、それに消費税強行導入、みんなそうでしょう。だいたい労働運動をここまで押さえこんできたのは、まったく非民主的なファッショ的な排

除と弾圧です。そこまできてきているのに、もつとも民主的でない、幹部闘争の現化みたいな連合がここまでのし上がってきて、わが総評が手もなく城を明け渡そうとしている。こんなバカな時代逆行的なことでは話にならないかと思えますよ。

ぼくは連合についての大事なことを忘れていないかと思っています。手続きとか経過じゃないもの。基本的に一人ひとりの労働者や組合員をなんと思っているのかということ、怒りをもつてもっと大きく宣伝しなきゃいけないんじゃないかと思えますね。

不当に差別され、配置転換され、活動家がおさえられているのは、国労だけじゃありません。連合が前面に出てくればくるほど、そうなっているわけだ。しかも自殺者が出るだけでなく、そのうえ災害と職業病もふえていますからね。

そういう意味で日本の労働運動に欠けているものはいったい何か。もつと組合員を大事にする、人間を大事にするということを大きな声にし、連合批判を下からもう一度やり直す以外にないということでしょう。

下から労働運動を強化する、そのためにも先生からもつと学ばにゃいかんですね。よく労働運動と社会主義運動の融合ということがいわれますが、それは徹底的な民主主義のたたかいをつうじてこそ、それが実現されるわけですから。

編集部 話につきましては、今日はここらへんで終わらせていただいて、さらにくわしい話は次の機会に待ちたいと思います。

灰原 不十分かもしれませんが、ぜひこの本を読んでいただいて、ご意見を出してください。よろしくお願いいたします。

編集部 今日はありがとうございました。

— これからの労働者運動の展望を示す！ —

号外「われら今、何をなすべきか — 都議選、参院選の総括と展望 —

— ご購読を 九月六日発行、定価三〇〇円 —

多くの読者から、都議選、参院選の結果をどうみたらいいのだろうか。どのように総括し、展望を切り拓けばいいのだろうかとの声が寄せられています。編集子の思いも同様です。

こうした読者の声に真正面から答えたのが「われら今、何をなすべきか— 激動する情勢に立ち遅れるな」(本誌第四一〇、四一一号)、そして「続・われら今、何をなすべきか— 『周辺部』の反乱を『基軸部』へ」(本誌四一二、四一三号)の坂牛論文です。前者は都議選、後者は参院選の全面的総括です。そして今、大きな反響をよんでいます。

二つの選挙— この端初を開いたのが新潟の仲間ですが、— 総括は、労戦再編問題もからみ、激動する労働運動の展望を明らかにする上で、避けて通れない大きな課題です。

そこで、社会通信社では坂牛論文を中心に号外「われら今、何をなすべきか— 都議選、参院選総括と展望」を発行することにしました。発行は九月六日の予定です。詳細については、次号で紹介いたします。読者諸氏の積極的なご活用を願ってやみません。

なお、号外として発行いたしますので、ご購読希望の方は、社会通信社までご一報くださることをお願い申し上げます。予価は三〇〇円です。